

映画を題材にしたWRD (基礎ゼミ) の授業のメリットとデメリット、そして近年の学生の変化

はじめに

木村が2003-2007年度に行ってきた映画を題材としたWRD (2005年度までは基礎ゼミナール) 「映画を論ずる」の授業内容を振り返り、そのメリットとデメリットについて考えるとともに、近年の学生の変化とそれに対応したWRDの授業の方向性を探る。(因みに成城大学に赴任した最初の年である2002年度に担当した基礎ゼミナールのテーマは「芸術を論ずる」であった。)

1. 授業内容 (別紙のシラバスも参照)

前期

主たる内容: 自分で選んだ一本の映画作品について分析し、その結果を発表し、更にその内容をレポートにまとめ直す。

義務:

- ・発表1回 (発表者はハンドアウトと映像資料を準備、発表の翌週には、木村とTAによるコメント表 (配付資料参照) を渡す)
- ・他のメンバーから勧められた映画作品についての感想の短い (2000字程度の) レポートを1本 (ゴールデンウィーク後の授業で提出し、木村とTAの添削に先立って相互添削)
- ・前期の授業の感想と反省点についての短い (2000字程度の) レポートを1本 (後期最初の授業で提出し、木村とTAの添削に先立って相互添削)
- ・発表内容を質疑応答や木村やTAのコメントを踏まえてまとめ直した長いレポートを1本 (後期2回目の授業で提出)。

他に、他人の発表について、指名されての質問を1回、自発的な質問を2回。

目標:

- ・自分で問題設定をした内容について論理的に語り、書くこと。
- ・他人が論じ、書いた内容を批判的に吟味し、議論すること。

後期

主たる内容: 木村が学生の要望も考慮しつつ選んだ5-6本の中から1本の映画作品を選び、木村が指定したテーマ (配付資料参照) の中から自分の取り上げるものを選び、文献・資料を参照した上で、考察・分析の結果を発表し、更にその内容をレポートにまとめ直す。(1つの映画について4-5人が担当するため、映画作品ごとにグループで打ち合わせを行い、発表テーマの調整等を行うが、発表とレポート執筆はあくまでも個人の責任である。ただし、作品データ等の資料の共同作成は認める。)

義務:

- ・発表1回 (発表者はハンドアウトと映像資料を準備、発表の翌週には、木村とTAによるコメント表 (配付資料参照) を渡す)
 - ・後期の授業の感想と反省点についての短い (2000字程度の) レポートを1本 (冬休み明け最初の授業で提出し、木村とTAの添削に先立って相互添削)
 - ・発表内容を質疑応答や木村やTAのコメントを踏まえてまとめ直した長いレポートを1本 (冬休み明け2回目の授業で提出)。
- 他に、他人の発表について、指名されての質問を1回、自発的な質問を2回。

目標: 前期の目標に加えて

- ・文献・資料の探し方の初歩を身に付ける。
- ・文献・資料を批判的に吟味しつつ活用する仕方の初歩を身に付ける。

2. 授業のメリットとデメリット

メリット:

- ・映画という親しみやすい題材を通じて大学で学ぶための基礎的な力を養うことが出来る。木村にとっても、自分の専門領域を生かしつつ授業を行うことが出来る。
- ・映画は多面的で複雑であるため、自分の関心に合わせた切り口からの問題設定による分析が可能である。
- ・映画学・映画史研究は歴史・蓄積が浅いため、1・2年生でもまだ誰も発見していないオリジナルな分析結果に辿り着ける可能性が充分にあり、そうした場合には学生の達成感や満足度は極めて大きなものと

なる。

- ・AV機器を用いてのプレゼンテーションに慣れることが出来る。

デメリット:

- ・映画という親しみやすい題材を取り上げることから、授業自体が楽であると勘違いして受講する学生がいる。
- ・映画は多面的で複雑であるため、どこからどう分析していいかわからない場合が多い（特に自分自身で問題設定をするということが苦手な学生の場合には）。
- ・映画の分析は、作品を繰り返し見る必要があるため、発表の準備に時間がかかる。
- ・映画学・映画史研究は歴史・蓄積が浅いため、また、欧米文献の日本語訳が必ずしも多くないため、文献・資料を探すのに苦労することが多い。
- ・発表に不慣れた学生にとっては、AV機器を用いてのプレゼンテーションは負担が重い。機材トラブルも時々あり、授業時間が大幅に延びることもしばしばである。

3. 近年の学生の変化

- ・木村の実感では、基礎的な学力（特に日本語力）、学習意欲ともに低下が著しい（別表の成績分布も参照）。
- ・発表の準備に掛ける時間がどんどん短くなっている。
- ・自分自身で問題設定をすることが出来ない学生が増えている。
- ・ネットからの盗用が増えており、しかも罪の意識が無い場合が多い。

↓

考慮すべき問題点

- ・事前に準備時間が大量に必要な内容は、もはやWRDの授業には向かないのではないかと？ WRDの授業内容は、授業時間内の訓練を重視する方向で考え直す必要はないか？（昨年度の高原先生のWRD研究会での報告を参照。）事前に準備が必要な内容は、各学科の基礎演習等で扱うべきではないか？
- ・基礎学力の低下に鑑みるに、WRDに相当する授業は最早週1コマでは足りず、ロジカル・シンキング、レポートの書き方、発表と議論の仕方等々に分けた授業が必要なのではないか？

参考

後期に取り上げた映画一覧（年度ごとに授業で取り上げた順に配列）

2003年度

『駅馬車』（ジョン・フォード監督、1939年）／『三つ数えろ』（ハワード・ホークス監督、1946年）／『北北西に進路を取れ』（アルフレッド・ヒッチコック監督、1959年）／『ボヴァリー夫人』（ジャン・ルノワール監督、1933年）／『市民ケーン』（オーソン・ウェルズ監督、1941年）／『ジョーズ』（スティーヴン・スピルバーグ監督、1975年）／『晩春』（小津安二郎監督）

2004年度

『駅馬車』／『裏窓』（アルフレッド・ヒッチコック監督、1954年）／『ハイ・シエラ』（ラオール・ウォルシュ監督、1941年）／『ボヴァリー夫人』／『マクベス』（オーソン・ウェルズ監督、1948年）／『惑星ソラリス』（アンドレイ・タルコフスキー監督、1972年）／『晩春』

2005年度

『駅馬車』／『三つ数えろ』／『市民ケーン』／『惑星ソラリス』／『晩春』

2006年度

『駅馬車』／『三つ数えろ』／『市民ケーン』／『惑星ソラリス』／『晩春』

2007年度

『駅馬車』／『三つ数えろ』／『ふしぎの国のアリス』（C・ジェロニミ、H・S・ラスク&W・ジャクソン監督、1951年）／『市民ケーン』／『晩春』